

説 苑

電氣通信學會の使命と任務

會長 濱 田 成 徳

1. 日本文化の再建と學術体制の刷新

我國に於ける諸般の制度、組織の改革が着々として進行しつつある時に、多年の懸案であつた學術体制の刷新も日本學術會議法の成立によつて實行への第一歩を踏出したことは慶賀に堪えない所である。學術會議の内容や考え方には未だ我々の志から遠いものがある。又會員の選舉に就いても幾多改良すべき點なしとしない。併し、最も大切なことは之等の外形的組織や体制にあるのではなく、之を動かす精神の如何にある。このことはたゞに學術体制の問題に止まらず、現在行われつつある總ての刷新、改革にあてはめて考うべき根本問題である。長い間我々の頭を支配して居た古い考え、封建的な、固定的なものの考え方、非科學性、非合理を改めるのでなければ、どんなに外形的な組織の改善を行つても結局それは無駄である。昔から新しい革囊に入れる酒は必ず新しくなければならぬという言葉がある。そして新しい革囊を作ることは比較的容易であるが、新しい酒を持來らすことの如何に困難であるかはしばしば我々の味つた經驗である。誠に日本再建の最大困難はこゝにありと言わねばならない。

日本の近代文化はその多くの質的量的成果にも拘らず一つの失敗であつた。結局それは本質に於いて病的缺陷を持つた假裝文化であることが今日明かにせられたのである。明治の初年日本人は燦然たる歐米文化に幻惑せられて、文化の由來する本質を探索し、認識することを忘れた。科學的思考力や哲學的訓練を缺いた當時の日本人の大なる誤謬であつた。その結果は必然的に西洋文化の無批判的輸入、皮相なる模倣、従つてその中毒となり、情性滔々として今日にまで及んで居る。かくして建設せられた近代日本文化の特質は眞理と自由とを愛する精神から背離し、特に文化の開拓者又指導者たるべき學術を尊重せざることにあつた。日本學術の性格がいぢけた盆栽の如く、自主的創造的でなく、社會から遊離し、之を指導する實力なきものとなつたのは當然である。従つて日本の理、工、農學は生産を指導し得ず、醫學は死亡率を減らし得ず、法、文、經濟學は政治に追従し、全學術を擧げて閥族の手先に使われる結果となつたのである。八十年に亘る日本近代化の歴史に於いて遂に國民の非科學性、非合理性、封建的精神を救うことが出来なかつたのは言われありというべしである。

我々は以上の意味に於いて近代日本文化と學術の關係、その本質に就いて反省し、過去の失敗を率直に認め眞の文化建設に努力すべき責務を痛感するのである。

2. 學會の新しい使命と任務

學會とは言うまでもなく専門學徒の科學的連絡協力機關であつて、學術体制を構成する重要分子である。故に學術体制の刷新は日本學術會議の設立を以て終るものでなく、學會の刷新をも含むべきは

當然であると思われる。特に上に述べたような日本再建の根本的意義、文化と學術との因果関係を考え併せるならば、このことは自明であろう。我々は日本學術の性格を改めなければならぬ。之を國民のもの、社會のものとし、新しい文化の根底又推進力としなければならぬ。このことの成否は偏へに科學者技術者の双肩に懸つて居る。我々は今夫々の立場に於いて自己の責務を遂行すると同時に、その連絡協力機關である學會を活用して日本學術の性格一新に乗出すべきである。學術の研究機關である學校、研究所、協力機關である學會、この兩者の刷新、改革なくして日本學術會議の目的達成、従つて日本學術の新なる興隆は到底期待すること困難である。或人は言うであろう、今日は經濟情勢が極めて悪いから、靜かに後日待つ以外に手はないと。或は學術會議が動き出すのを俟つて然る後に學會活動を始めるのが順當であると。併し、このように考えることは上に述べた意味の認識を缺くためではないであろうか。特に世界情勢の進展に照して我々は一日も安閑として居ることが出来ないと思うのである。

然らば實際問題として我が電氣通信學會の場合には、之を如何に活用若くは刷新すべきであるか？ 古い傳統とインフレーションの重壓下に於いて果してこのことは可能であろうか？ このことは一新事態を自覺せる會員諸君の決斷と勇氣ある行動に俟つ外はない。筆者はこゝに思を致せる會員の總意をまとめ、本會の新なる使命と任務とを確立する必要があると信するものである。

本會の目的は定款第二條に規定してあるように「電氣通信に關する學術の研究と知識の交換並に關係事業の振興」となつて居るが、之だけで上に述べた目的は達成されるであろうか？ 筆者はこれ以外に學會は次の如き諸活動をも考慮すべきであろうと考える。

(1) 電氣通信技術者の社會的地位の向上を圖る。

(2) 我國の科學者、特に技術者に社會的、政治的意識薄く、經濟觀念の乏しいことは近來外國人も指摘する所である。本會は大學その他の機關と連絡して眞の意味に於ける「技術者」の輩出に努力する。

(3) 科學技術の振興による文化的平和國家の建設に積極的に努力する。特に經濟復興計畫の技術的検討に寄與する。

(4) 國民に電氣通信知識の普及を圖る。

(5) 外國諸學會との協力を行ふ。

(6) 本會雜誌の劃期的改善を圖る。このために編修機構の思い切つた強化をなす。

要するに筆者の意圖する所は、自覺せる科學者、技術者の奮起によつて學會を再建し、従つて學術體制刷新の實を擧げ、學術をして眞に文化の創造者又開拓者たる役割を果さしめんとするにある。この意味に於いて電氣通信學會の再建は決して些事でない。

以上筆者の愚見を申述べた次第であるが、之に對し忌憚なき批判を賜り、同時により積極的建設的意見を廣く開陳せられることにより、本會の新なる使命と任務の確立に就いて會員諸君の御協力を得るならば誠に幸とする所である。

(昭和23年11月26日)